

頂石課程與畢業戲劇公演 —以淡江大學日文系為例—

王憶雲

淡江大學日本語文學系助理教授

摘要

淡江大學日文系目前將大學四年級的畢業專題製作視為統整學生四年所學的頂石課程 (Capstone Course)，其中一個項目是畢業戲劇公演。公演以日文進行，學生必須要理解劇本內容，否則在演出時無法自然地表現登場人物的情感以及思緒，但是依照課程規劃，日文系的學生在學校教室的學習中，較難有教科書以外的語言經驗，甚至有些學生必須透過為了不懂日文的觀眾而準備的中文字幕，才真正了解劇本內容。但從另一方面來說，透過對劇本的閱讀、理解以至於演出，必定能夠加深不同面向的日文能力，這點亦是戲劇公演可以成為日文系頂石課程的原因之一。

本論文將點出本校日文系目前指導學生戲劇公演所遭遇的問題，並試著提出改善方法，讓學生能更順利地進入以日文演出的舞台劇世界。

【關鍵詞】

日文系、頂石課程、戲劇公演、日語教育

Capstone Course and Senior Play: A Case Study of Department of Japanese at Tamkang University

Wang, Yi-Yun

Assistant Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

At present, the Department of Japanese at Tamkang University views the Graduation Project by the seniors as the capstone course which integrates what students learn in their four-year study. Graduation Project includes several options, one of which is senior play. The play is in Japanese, and this requires students to fully understand the scripts to render the characters' emotions and thoughts naturally in formal performance. However, it is often that few students in this department have experience in language other than studying Japanese textbooks. Some students do not even understand the script until they read through the Chinese subtitles of the play for audiences who do not speak Japanese. Through the study, comprehension and interpretation of scripts, students can definitely see considerable progress in multiple aspects of their Japanese skills. This is one of the reasons that senior play can become a part of the capstone course in this department.

This research will identify the issues in senior play which the Department of Japanese at this University currently encounters and attempt to propose feasible solutions, in hopes of enabling the students to enjoy the world of Japanese stage play.

【Keywords】

Department of Japanese, Capstone Course, Senior Play,
Japanese Education

キャップストーン・プログラムと卒業演劇公演 —淡江大学日文系を例として—

王憶雲

淡江大学日本語文学系助理教授

要旨

淡江大学日文系では卒業制作（卒業專題）を四年間の学びのキャップストーンとして位置づけようとする動きがある。その卒業制作の一つに「演劇公演」がある。この演劇公演は外国語劇であり、学生はストーリーや場面の状況を理解するのに多くの時間を要している。脚本を理解しないままに台詞を覚えて役を演じたとしても、それは暗記の力に頼っているに過ぎない。教科書の例文などとは異なり、脚本の台詞の背後には、登場人物の感情・天気や時間帯など、複数の「状況」が存在している。学生は教科書の範囲を超えた日本語会話の経験が乏しく、脚本の「状況」を理解する事が難しい。観客の為に用意する中国語字幕によって初めてストーリーを理解した学生さえもいる。とは言え、日本国外で日本語を学ぶ学生にとっては、脚本を通じて日常会話に触れることはまたとない機会であろう。

「状況」を踏まえて脚本を理解する事は、教科書で学んだ文法や言い回しを、自身の中に落とし込むことにも繋がるのである。

このように見ると、演劇公演を日文系の学びのキャップストーンとして位置づけることは、意味あることと言える。しかし、現時点の演劇公演の活動方法には未だ複数の問題がある。今後も学生が脚本の理解をより深められるように、改革を進めてゆく必要がある。

【キーワード】

日本語学科、キャップストーン、演劇公演、日本語教育

キャップストーン・プログラムと卒業演劇公演 —淡江大学日文系を例として—

王憶雲

淡江大学日本語文学系助理教授

1. はじめに

「キャップストーン・プログラム (Capstone Program)」、または「キャップストーン・コース (Capstone Course)」とは、アメリカの大学で考案された実践的教育プログラムである。当初は、特に公共政策・公共行政の分野において、学士課程・修士課程の学びの総仕上げとして、学生が自ら地域社会に入り、社会問題を分析・解決策を提示することを目指したものであった。現在では、分野にかかわらず、大学・大学院における学びの集大成として、学生主体となって行われる実践的な教育プログラムを、「キャップストーン・プログラム」などと呼ぶようになっている。

日本や台湾において、「キャップストーン・プログラム」を取り入れる高等教育機関が近年増加しており、その成果も数多く報告されている¹。特に台湾では、中華工程教育学会 (Institute of Engineering Education Taiwan, IEET) が大学生の四年間の学習を評価する方法として「キャップストーン・コース」を導入すべきで

¹ 日本における報告として、久野高志 (2006) 「大学地域連携教育プログラム (キャップストーン・コース) の開講と実施状況」 (『作新学院大学人間文化学部紀要』4、p. 97-117)、原田明子 (2007) 「「キャップストーンコース」における児童英語活動」 (『作新学院大学人間文化学部紀要』5、p. 77-90)、青山公三 (2013) 「公共政策学の新しい実践教育手法 : 地域課題解決型実践教育プログラム「キャップストーン」の試み」 (『京都府立大学学術報告. 公共政策』5、p. 73-82) などがある。また、台湾における報告には、邱于真 (2014) 「教與學的合頂石—總整課程 (Capstone Course)」 (『評鑑雙月刊』49、財團法人高等教育評鑑中心基金會評鑑雙月刊網站 <http://epaper.heeact.edu.tw/archive/2014/05/01/6152.aspx>、〔2019年3月14日閲覧〕)、符碧真 (2017) 「大學學習成果總檢驗 : 合頂石—總結性課程」 (『教育研究集刊』63-1、p31-67) などがある。

あると呼びかけている²。

このような流れを受けて、淡江大学日本語文学系（以下「日文系」と略）においても、卒業演劇公演（以下、「演劇公演」と略）を始めとした卒業制作を大学4年間の日本語学習の「キャップストーン」として捉えようとする動きがある³。日文系の学生は、日本語を「聴・説・寫・讀・譯（聴く・話す・書く・読む・訳す）」⁴という五つの側面から体系的に学んでおり、「卒業演劇公演」は、その五技能を総合的に活用する必要がある。よって、演劇公演を日文系における学びの総仕上げ——「キャップストーン」として位置づけることは有意義なことであろう。

本稿は、淡江大学日本語文学系における演劇公演の活動の概要を公開しようとするものである。その目指すところは、銘伝大学応用日本語学系の事例を報告した平野由美子（2007）「劇作りの試み—「日本語劇」という授業を例に」（『銘伝日本語教育』10）や、台湾首府大学応用外語系の事例を報告した藤井奈緒美・前川正名（2014）「台湾における日本語関連学科の卒業公演について」（『梅花日文論叢』22）などの先行研究と同様に、日本語教育者に広く淡江大学における演劇公演の現状を伝えることを目的としている。

先述の先行論においても、演劇公演のあり方には複数の問題があることが指摘されており、様々な取り組みが紹介されている。論者は演劇公演の中で、脚本の選択とその中国語訳が、演劇公演の出来映えを左右する重要なものだと考えており、毎年の演劇指導の課程で非常に頭を悩ませている。しかし、平野（2007）や藤井・前川（2014）において、脚本についてはあまり深く触れられていない。それは、

² 注1 掲符碧真（2017）論文

³ 曾秋桂（2018）「キャップストーンコースとしての「卒業制作」の意味—淡江大学日本語文学科の「卒業制作及び指導」科目を例に—」『文化情報学』（同志社大学文化情報学会）13-1・2、p. 55-60）。

⁴ 淡江大学日文系では、以下の能力を備えた人材の育成を目指している。「1. 日語聴、説、讀、寫、譯五項技能。2. 接軌國際之能力。3. 掌握資訊之能力。4. 迎向未來之能力。」（日文系教育目標）

日本人教員と台湾人教員で着目するポイントが異なるためではなかろうか。そこで本稿では、台湾人教員としての着眼点で淡江大学日文系の演劇公演の「脚本」に関わる問題点を指摘するとともに、演劇を通した日本語学習の意義について、今後の可能性を示したいと考える。

2. 淡江大学日文系における「演劇公演」の概要

2.1. 卒業制作の一つとしての「演劇公演」

「演劇公演」について述べる前に、先ず、淡江大学日文系の卒業制作（卒業專題）の状況について簡単にまとめておきたい。

2018年度現在、淡江大学日文系における卒業制作（卒業專題）の形態として、論文・レポート・翻訳・創作・映像作品・演劇公演・弁論大会・観光ガイド・雑誌制作・日本語教育実習の10種がある。淡江大学日文系ではこの中から一つ以上を選び、一年をかけて大学入学以来の学びの集大成として取り組むことになる。第四学年では必修科目の「卒業論文の書き方と指導」（卒業專題寫作與指導）を履修し、論文作成にあたって必要な学術的な日本語を学ぶ。学生達はそれと並行して、各自で卒業制作を進めるのであるが、映像作品・観光ガイド・雑誌制作・日本語教育実習には制作内容に直接関わる授業が存在しており、そこでは教員の主導のもとで制作が進められている。その一方で、上記四種以外の卒業制作には制作内容に関わる授業が設定されていない。よって、演劇公演は演劇に興味を持つ学生によって行われる有志活動としての一側面がある。

このようなことから、淡江大学日文系における演劇公演では教育目標や学習計画がシラバスなどによって明確に示されているわけではない。とはいえ、淡江大学日文系における演劇公演が、第四学年が大学における学びの集大成として取り組むものであることを鑑みるなら、淡江大学日文系が教育目標として示す日本語の五技能（「聴・説・寫・讀・譯（聴く・話す・書く・読む・訳す）」）を、最大限生

かせるような活動に導くことが教員には求められている⁵。

2.2. 学生の担う役割について

さて、ここまで示したように、卒業制作として演劇公演を選択した学生は、日本語で書かれた既存の脚本や、学生自らが書いた脚本などを用いて、舞台劇の完成を目指す。参加可能な人数を日間部 30 名、夜間部（進學班）20 名としているが、例年「演劇公演」を選択するのは、10～40 名程度で、希望者が特に少ない場合には日間部夜間部合同で制作に当たる。

基本的に脚本の選定、キャストの決定、練習、宣伝等のほとんどを学生が中心となって行う。教員は日本語の発音・イントネーションの訂正や演技上のアドバイスなどを中心に指導を行い、時に学生の相談に乗る。以下の表 1「淡江大学日文系演劇公演における主な役割一覧」に、役者を除く主な役割を示した。

表 1「淡江大学日文系演劇公演における主な役割一覧」

| 役割 | 仕事の概要 |
|-----------|---|
| 総監督(正・副) | 公演当日に向けてのコーディネート全般を行う。役割としては日本の舞台監督に近い。 |
| 演出監督(正・副) | 演出に関わる仕事を行う。脚本を解釈し、稽古を中心になって取り仕切る。 |
| 美術・衣裳組 | 大道具や持ち道具・衣裳の作成と調達を行う。 |
| 照明組 | 照明をデザインし、公演時に照明の操作をする。 |
| 音響組 | 音源を収集し、BGMや効果音をデザインする。公演時に音響の操作をする。 |
| 制作組 | 広報活動を行う。パンフレットの作成、協賛の依頼 |

⁵ なお、演劇公演を行っている銘伝大学では、以下の五点を 2007 年時点での演劇活動の目的・目標として示している。「①日本語の四技能（「話す」「聞く」「読む」「書く」）を向上させる ②チームワークを養う ③学習者の個性を伸ばし、自分に自信をつける④学習者が持つ底力を発揮する ⑤自己の健康管理に気をつけ、自己改革していく」。平野（2007）p. 221-222。

| | |
|---------------|----------------------------------|
| | 等をする。 |
| 脚本・字幕組 | 脚本の作成・改編・中国語翻訳を中心となつて行い、字幕を作成する。 |

人数の都合上、それぞれの学生が複数の仕事をこなすことになる。参加人数が少ない場合には、役者と複数の役割を兼ねる必要があり、学生の負担が非常に大きくなるという問題がある。そのため、指導教員は学生の希望を聞き、公演を日間部と夜間部の合同で行うべきか、個別に行うべきか、見極める必要がある。

表1に示した役割のうち、上部の六項目（総監督、演出監督、美術・衣裳、照明、音響、制作）は一般的な舞台公演に見られる役割である。

日文系における「演劇公演」は外国語による上演であるため、特に「脚本・字幕組」というグループを設けている。このグループの本来の役割は、公演当日に中国語に翻訳した脚本を字幕として観客に提供することである。言うまでもないことであるが、演劇公演では役者、演劇監督、翻訳字幕を担当する学生だけではなく、美術・衣裳・照明など裏方を担う全ての学生にも脚本の正しい理解が求められるが、脚本を日本語のまま正しく理解できない学生も少なからずいる。そのため、多くの学生にとって中国語に訳された脚本は、ストーリーを理解する手助けになっている。この「脚本・字幕組」の活動内容は演劇公演の活動の中でも、重要なものとなっている。そのため、脚本に関わる事柄は後にもう少し詳しく取り上げる事とする。

2.3. 「演劇公演」のスケジュールについて

次に、公演当日までのスケジュールについてである。年度により進捗状況も異なるが、おおよその目安として2017年度（2017.8～2018.7）の日程を示した⁶。

⁶ 正式公演の日程は、年度によって二週間程度の振れ幅がある。これは、劇場

表 2 「淡江大学日文系演劇公演のスケジュール」

| | 全体 | 役者 | 裏方 |
|-----------------------------|----------------------|-------------------|--|
| 9月 | (新年度授業開始) | | |
| 10月 | 演劇公演説明会 | | |
| 11月 | 指導教授同意書提出 | | |
| 12月 | 脚本の決定、脚本の翻訳、配役・役割の決定 | | |
| 1月 | 全体会議 (冬休み) | 自主練習 | |
| 2月 | 全体会議 (冬休み) | 読み合わせ開始 立ち稽古開始 | 中国語版脚本冊子の制作 |
| 3月 | 全体会議 | 立ち稽古 | 音響・照明・衣裳のデザイン、字幕 PPT・広報計画書の作成 |
| 4月 | 全体会議 | 立ち稽古 通し稽古 | 音響・照明の計画書提出、宣伝ビジュアル撮影、協賛の募集、ポスター・パンフレットの作成 |
| 5月 | 全体会議 | 通し稽古 | 美術・音響・照明・字幕のタイミング確認、チケット配布 |
| リハーサル (5月7日)・正式公演 (5月9、10日) | | | |

「演劇公演」は卒業制作の一環であり、学生は第三学年の終わりに他の卒業制作とともに演劇公演の概要を知ることになる。ただ、実際の作業開始は第四学年への進級後、11月中旬に「指導教授同意書」

使用に当たって、外語学院の他学科との調整が必要であることや、年度によって学年暦が大幅にずれることなどに起因している。2015年度は5月9日（日間部）と5月6日（夜間部）、2016年度は5月15、16日（日間部）、5月2日（夜間部）であった。

airiti

を提出してからである⁷。学生に与えられた制作時間は、翌年5月上旬の正式公演までの約半年間である。公演場所は淡江大学の文学館にある淡江大学実験劇場である。

参加者は、総合監督（総召）が招集する全体会議を通して様々な事項を決定し、各自の役割を果たしていくことになる。参加者の確定後には、先ず脚本を探す。脚本が決定したら、全ての参加者が手分けをして脚本を中国語訳する。2016年度までは、脚本の決定後直ぐに配役や裏方の役割を決定し、翻訳は脚本・字幕組のメンバーのみで行ってきた。しかし、日本語の脚本を読みこなせない学生が、内容を理解しようという努力を怠り、いたずら翻訳を頼りにするという傾向が見られた。

そこで、2017年度からは脚本が決まった早い時点で、全ての学生が分担して中国語版の脚本を作ることで、全ての学生がストーリーを理解してから具体的な活動を開始できるようにしたのである。役者は冬休み期間中に、教員が吹き込んだ台本の音声データを元に、台詞をできるだけ暗記する。本格的な稽古が始まるのは冬休み明けの2月以降である。また、総監督・演出監督は基本的に稽古にも参加するが、それ以外の裏方のメンバーは3月に入ってから活動を開始する。

なお、日文系は一学年が四クラスに分かれているため（日間部三クラス、夜間部一クラス）、同学年であってもクラスが異なれば顔すら知らないことさえある。そのため、11月の作業開始時はお互いを知り合うところから始める。さらに、5月に演劇公演を終えた学生は6月には卒業してしまうため、過年度生の体験を聞く機会もほとんどない。学生は困難に直面した時、自力で乗り越えるか教員の助けを借りることになる。この際に、一致団結して問題解決に漕ぎ着けた場合、非常に強い団結力が生まれる。しかし、学生は他の授業

⁷ 「指導教授同意書」の提出時期は、慣例として前期中間テストの前週となっている。2016年度は11月11日、2017年度は11月10日が最終的な締め切りであった。

の課題等もこなしながら演劇公演に向けた活動に取り組むのであり、短期間で演劇公演を成功させるために非常な努力が求められるのも事実である。

2.4. 過去8年間に採用された脚本について

ここからは、脚本について述べる。2010～2017年度の8年間に採用された脚本について、以下の表3にまとめた⁸。

表3「過去に採用された脚本とその選定方法」(2010～2017年度)

| 年度 | 日間部 | | 夜間部 | |
|------|--|---------|----------------------------|---------|
| | 脚本(作者) | 選定方法 | 脚本(作者) | 選定方法 |
| 2010 | 超正義の人 (大垣ヤスシ) | 学生による選定 | 卒塔婆小町 (三島由紀夫) | 教員による提案 |
| 2011 | 天使は瞳を閉じて (鴻上尚史) | 教員による提案 | PICK POCKET (北村想) | 教員による提案 |
| 2012 | 螺子と振り子 (北村想) | 教員による提案 | ミス・ダンデライオン (成井豊) | 教員による提案 |
| 2013 | ウォルター・ミティにさよなら ⁹ (高橋いさを) | | | 教員による提案 |
| 2014 | 患者のエンドロール (米澤穂信) | | | 教員による提案 |
| 2015 | ミシャクジ様の囁き (日文系有志) | 学生の創作 | 3×6≠サーフィン (金森大輔) | 学生による選定 |
| 2016 | ナツヤスミ語辞典 (成井豊) | 教員による提案 | 白夜 An Intermezzo (寺山修司) | 教員による提案 |
| 2017 | ブラッディー・マリー | | | 学生による |

⁸ 表3は105学年度第3回「日文系新緑向陽「頂石課程」推進会」における内田康「日文系演劇公演課程的指導與心得」(2017年3月27日、於淡江大学)の内容の一部を改めたものである。

⁹ 2013・2014・2017年度は、参加人数の都合上日間部と夜間部が合同で上演を行った。

日本語学科の「演劇公演」では、学生自らが日本語で脚本を執筆することもあれば、日本語の既存の脚本から選定することもある。その選定期間は、おおむね12月上旬である。過去7年の間に13の脚本が上演されている。そのうち、学生が創作した「ミシャクジ様の囁き」(2015年度日間部)と、学生が脚本を選定した「超正義の人」(2010年度日間部)、「3×6≠サーフィン」(2015年度夜間部)、「ブラッディー・マリー」(2017年度)以外は、全て教員の提案によって選択されたものである。参加者の多くは、日本の舞台劇に関わったことがない。そのため、教員が参加者の顔ぶれや男女の割合を見て脚本を選んだり、一部の演劇に理解のある学生を選んだりすることになる。そのため、活動開始当初、舞台演劇に興味はあっても、脚本の内容に興味を持ってない学生もいる。この点については、先述の「脚本・字幕組」の役割と関連させながら、次章において詳しく論じたいと考える。

本章では「役割」「スケジュール」「脚本」の三項目について、淡江大学日文系の演劇公演の概要を説明してきた。既に少し触れたが、演劇公演を卒業制作の一環として行う上で、いくつかの問題が存在する。次章では、主に脚本に関わる事柄について、問題点とその解決策を述べたい。

3. 脚本に関する問題点

本章では、第一章に述べた概要を元に、淡江大学日文系の演劇公演が抱える問題点を、脚本の内容理解に関わる事柄について見てゆきたい。

3.1. 脚本理解の難しさ

「2.4. 過去8年間に採用された脚本について」において述べたように、演劇公演に用いられた脚本の多くは、教員の提案を受けて採用されたものであり、学生が自主的に上演作を決めることは容易で

はない。これは、学生の演劇に対する知識が不足しているためだと思われる。淡江大学の日文系では演劇を扱う授業もないため、卒業演劇公演に参加して始めて脚本という形態の日本語に触れる学生が大部分である。

そのため、上級生の舞台を見て演劇公演への参加を決め、いざ、活動を開始しようとしても、自力で脚本を探し出すことができなかったり、決定した脚本に対して興味を持てなかったりする学生もいる。実際に、2016年度の日間部の演劇公演に参加した学生が、次のような意見を述べている。

試看 DVD 時我還記得大家幾乎都看到快睡著，因此這部作品對我的吸引力真的不是很大，只覺得角色多很複雜的一部大劇。因為劇情的複雜，讓我花了一個多月才搞懂這部戲在幹嘛，漸漸得才愛上了這部劇。

(DVD を見た時、ほとんど皆が寝そうになっていたように記憶しています。そこで、この作品は私にとってそれほど魅力的でなく、ただ「たくさんの人の登場する複雑で長い劇だなあ」とばかり感じていました。ストーリーが複雑で、この劇が何を表そうとしているのかを理解するのに一ヶ月かかりました。それからやっと、徐々にこの脚本を好きになっていきました。)

この DVD とは、プロの演劇集団である劇壇キャラメルボックスが演じた『ナツヤスミ語辞典』の舞台映像である。日本語字幕のある形で鑑賞したのだが、当初、大部分の学生はその内容についていけず寝てしまいそうになったという。さらに、この学生の場合は、脚本の内容を理解するのに、約一ヶ月を要している。

このような問題が起こる最大の要因は学生の日本語能力不足であるが、学生それぞれの個人的問題とは言い切れない一面もある。舞台劇は観客に「見せる」芸術であり、台詞だけでなく演者の身振りや表情、視線の送り方、相手との距離の取り方などといった非言語コミュニケーションも重視される。しかし、台湾で日本語を学ぶ学生の多くにとって、日本語は教室の中だけで用いる言語であり、授

業では文法事項や単語を正しく運用する事（＝言語コミュニケーション）が重視される。「大三出国留学」によって、一年間の交換留学を経験したことのある学生もいるが、全ての学生がこの制度を利用するわけではなく、日本語を日常生活に結び付けて用いたことのない学生も多い。そのため、演劇公演に参加する学生にとっては、台詞を丸暗記すること以上に、台詞の背後にある状況を理解しそれらを身振りや表情、視線などによって表現することが難しいのである。

また、演劇の上演台本では、台詞・ト書き・舞台の情景などが一緒に書かれている。この形態は演劇の脚本独特のもので、学生にとっては馴染みが薄い。そのため、最初の読み合わせの段階で、台詞とト書きを混同して読んでしまう学生さえいる。

このように、学生が学んできた日本語と脚本の日本語の間には大きな隔たりが存在している。脚本への理解を深めるためには、この隔たりを埋めることが必要不可欠である。しかし、現在の活動手順では、時間的な制約などから学生の脚本理解が深まる前に立ち稽古を始めざるを得ない状況である。

3.2. 脚本の理解を深めるために

現在、演劇公演の活動の大部分を学生主導で行っている。教員は週一度の全体会議や学生の日々の練習に立ち会い、その都度修正を図る。しかし時に、公演直前の通し稽古の段階になって、脚本を誤って解釈していることに気づくこともある。また、藤井・前川(2014)にも指摘されているように、役者以外の大多数の学生は、実質的に日本語をほとんど使うことはないという問題も見過ごせない¹⁰。そこで本節では、学生の脚本に対する理解を深めるために、教員はどのようなことができるのか考えてみたい。

なお、演劇公演を担当する教員は演劇の専門家ではなく、各教員の置かれている状況もそれぞれ異なる。学生も他の授業を受け課題をこなしながら演劇公演にも参加していることになる。そこで、論

¹⁰ 藤井奈緒美・前川正名（2014）、p. 44

者が現在置かれている状況においてできうることを考えた。専門家から見れば取るに足らない事柄であろうが、その点は断っておきたい。

○「日本文学史」の授業を利用した活動

日文系四年生の選択科目「日本文学史」の授業の一環として、日本の演劇史について説明し、教員が日本の劇作家を紹介し、脚本を学生に実際に読ませる機会を与えたいと考える。戯曲は現代ではそれほど文学作品として重視されていないが、近代において重要な潮流の一つとして位置づけられていた。そのため、「日本文学史」のを受講する学生にとっても、卒業公演に参加する学生にとっても有意義なものとなるであろう。

時期としては、「指導教授同意書」を提出し参加する学生が決定した直後、11月中頃が適している。「日本文学史」は日間部と夜間部の双方で開講されているが、夜間部の授業時間を用いれば、夜間部の学生だけでなく日間部の学生も都合よく聴講できるはずである。学生はあらかじめ演劇の脚本のスタイルを理解しておくことで、スムーズに演劇の世界に入ることができるであろう。演劇公演では、舞台の上で日本語演劇の世界を表現することにのみ焦点を併せがちである。しかし、翻訳を通してテキスト（脚本）への確固たる理解を獲得することも重要であろう。それにより、舞台上の可能性も広がるに違いない。

○「日語会話」の授業を利用した活動

学生たちは教科書の中に登場する会話文を目にしており、日本語学習の中でロールプレイなどを通して日常的に役を演じている。このような教科書の会話文や教室活動としてのロールプレイで、会話文をただ「読む」だけではなく、身振りや表情といった非言語のコミュニケーションに気を配りながら演じさせることも有効であろう。このように演劇的要素を授業に取り入れることは、日本語教育においても有益であることは広く知られており、実践報告も数多くある

11。

平野（2007）が演劇について「いろいろな教室活動の複合体とも言える」¹²と指摘しているように、非言語のコミュニケーションを普段から意識させてなじんでおくことは、演劇公演の活動を円滑に進めることに繋がる。

このような教室活動を行うのは、「日語会話」がより相応しいであろう。淡江大学日文系では「初級日語」「中級日語」「高級日語」は核心課程（中核課程）と呼ばれ、正確な文法の習得や文章読解を主眼としたものであり、教えるべき事柄が決められている。そのため、会話やロールプレイに比較的長い時間を割くことのできる「日語会話」で、演劇的手法を取り入れた授業を展開することを提案したいのである¹³。

このようにして、会話の成立には非言語のコミュニケーションが欠かせないものであることを、早い段階から学生に意識させておくことは、演劇公演の脚本の理解を深めることだけではなく、学生の日本語学習にも極めて有益であろう。

¹¹ 近年の報告として、宮原温子（2018）「日本語教育における一つの取り組み—演劇活動の実践から」（『目白大学高等教育研究』24、p65-73）、中山由佳（2012）「ひととものをつくる—演劇作品作りの現場としての日本語の教室から」（『早稲田日本語教育実践研究』1、p107-118）、清末逸子（2005）「演劇的活動を取り入れた日本語学習—ドラマ作りと即興演劇的活動を取り入れた会話授業の実践を通して」（『横浜国大言語研究』23、p48-38）などがある。また、『ドラマチック日本語コミュニケーション—「演劇で学ぶ日本語」リソースブック』（野呂博子・平田オリザほか編、ココ出版、2012年）では、複数の実践例のほか、教室活動に役立つ創作シナリオも収めている。

¹² 平野由美子（2007）、p. 220

¹³ なお、演劇公演の活動そのものを四年次配当科目の「日語会話四」にすることができれば、一年をかけて学生の脚本の理解を深めていくことができる。しかし、そのためには日文系全体のカリキュラムにも踏み込む必要があり、現実的ではない。

4. 演劇公演と「キャップストーン」

ここまで、淡江大学日文系における演劇公演について、概要を述べた上で、問題点と改善すべき点を述べてきた。

このように、日本国外で日本語を学ぶ学生にとっては演劇を通じて日本語に触れることは、教科書を通して学ぶことの難しい非言語のコミュニケーション能力を学ぶまたとない機会といえる。演劇公演は、教員が適切に働きかけを行うことができれば、自然で生きた日本語会話を身につける機会になるのである。

もちろん、演劇公演の目指すところは、学生の日本語能力の向上だけではない。演劇公演は複数の学生の協同によって成し遂げられるものであり、学生の協調性を高めるのにも有益である。協調性は職場において広く求められる能力であり、演劇公演という一つのプロジェクトを成し遂げたという事実は、学生に大きな自信を与えることになる。

2017年度「ブラッディー・マリー」を公演した学生が、公演終了後に演劇公演の活動から得たものについて、次のように述べている。

首先是認識了一群團員，從完全不認識到可以開玩笑，雖然過程中不少爭吵，但我覺得我最開心的一點是可以看到一個團隊還有每一個演員從零到上台演出的樣子，大家一天一天在進步，這是我覺得收穫最多的地方，來看的觀眾只看到我們演出的一個半小時，但卻不知道背後我們付出了半年的時間，寒假、春假、每個假日、平日的練習，那種跟著一起成長的感覺很棒，也很有趣。

〔自分にとっての演劇公演最大の収穫は、〕団員の皆と出会って、顔さえ知らないところから、冗談を言い合えるまでの中になったことです。喧嘩もありましたが、このグループに加わられたことが一番嬉しいことです。そして役者が舞台に上がるまで一步一步成長していく様子を見られたこと、これが私の最も大きな収穫になりました。観客が目にするのは公演の一時間半だけですが、観客はその背後には半年間の時間、冬休み・春休みや、全ての休日平日を費やした練習があることを知りません。そのようなみんなで成長してきたという感覚はとても素晴らしく、とても興

airiti

味深いものです。

この学生も述べているが、演劇公演はただ日本語劇を完成させることだけではなく、一つのプロジェクトにグループで取り組む過程にも大きな意義がある¹⁴。このような経験はまもなく社会に出る学生にとって、大きな自信に繋がることであろう。このように見ると、演劇公演は学びの「キャップストーン」であるとともに人生の「マイルストーン」にもなるものと言えよう。

本稿では特に脚本に関する問題を、教員の果たすべき役割という観点から論じてきた。その他にも改善すべき点は多くあるであろう。演劇公演において、学生が学んできた多くの能力を発揮できるよう、今後も努めてゆきたい。

〔附記〕なお、本稿は105学年度第3回「日文系新緑向陽「頂石課程」推進會」（王憶雲「日文系戲劇公演要項」内田康「日文系戲劇公演課程的指導與心得」2017年3月27日）の内容と、105学年度淡江大学日文系国際學術シンポジウム（2017年6月24日）で口頭発表したものに加筆修正を行って纏めたものである。

参考文献

○単行本

小林由利子・高山昇・吉田真理子・山本直樹・中島裕昭（2010）『ドラマ教育入門』図書文化社

野呂博子・平田オリザ・川口義一・橋本慎吾編（2012）『ドラマチック日本語コミュニケーション―「演劇で学ぶ日本語」リソースブック』ココ出版

¹⁴ このような過程を重視した演劇的活動として、いわゆる「ドラマ教育」がある。小山由利子（2010）はドラマ教育の目指す所を、「子どもの考えを行為的に変えていくというやり方で、学習者の個人的発達と社会的発達にかかわる」ことであると述べている。学生主導で進められる淡江大学日文系の卒業演劇公演は、このようなドラマ教育としての側面を見出すこともできる。

○研究論文・実践報告

〔中国語〕

邱于真 (2014) 「教與學的合頂石—總整課程 (Capstone Course)」
〔『評鑑雙月刊』 49、高等教育評鑑中心基金會評鑑雙月刊、
<http://epaper.heeact.edu.tw/archive/2014/05/01/6152.aspx>、2019年3月14日閱覽)

符碧真 (2017) 「大學學習成果總檢驗：合頂石—總結性課程」〔『教育研究集刊』 63-1、p31-67〕

〔日本語〕

青山公三 (2013) 「公共政策学の新しい実践教育手法：地域課題解決型実践教育プログラム「キャップストーン」の試み」〔『京都府立大学学術報告. 公共政策』 5、p. 73-82〕

内田康 (2017) 「日文系戯劇公演課程的指導與心得」(105 学年度「日文系新緑向陽「頂石課程」推進會」第3回資料)

清末逸子 (2005) 「演劇的活動を取り入れた日本語学習—ドラマ作りと即興演劇的活動を取り入れた会話授業の実践を通して」〔『横浜国大言語研究』 23、p48-38〕

小林由利子 (2010) 「ドラマ教育とは？」〔『ドラマ教育入門』 図書文化社、p. 10-22〕

曾秋桂 (2018) 「キャップストーンコースとしての「卒業制作」の意味—淡江大学日本語文学科の「卒業制作及び指導」科目を例に一」〔『文化情報学』(同志社大学文化情報学会) 13-1・2、p. 55-60〕

中山由佳 (2012) 「ひととものをつくる—演劇作品作りの現場としての日本語の教室から」〔『早稲田日本語教育実践研究』1、p107-118〕

原田明子 (2007) 「「キャップストーンコース」における児童英語活動」〔『作新学院大学人間文化学部紀要』 5、p. 77-90〕

久野高志 (2006) 「大学地域連携教育プログラム (キャップストーン・コース) の開講と実施状況」〔『作新学院大学人間文化学部

airiti

紀要』4、p. 97-117)

平野由美子 (2007)「劇作りの試み—「日本語劇」という授業を例に」(『銘伝日本語教育』10、p214-236)

藤井奈緒美・前川正名 (2014)「台湾における日本語関連学科の卒業公演について」(『梅花日文論叢』22、p37-50)

宮原温子 (2018)「日本語教育における一つの取り組み—演劇活動の実践から」(『目白大学高等教育研究』24、p65-73)



※2019年4月30日受領 2019年6月30日審査通過